

終刊にあたって

女子栄養大学栄養学部教育学研究室に集まった、学生、院生たちによる教育・研究活動を基盤にして発行され続けてきた本誌も、今年度末の橋本の定年退職により、12号をもって、終刊となる。「教育学研究室紀要—く教育とジェンダーく研究」の創刊号は、1998年6月に刊行された。それから、17年あまりが経過している。橋本の所属学会の課題研究や日本学術振興会科学研究費補助金研究などに忙殺されて、紀要を発行出来なかった年もある。

1995年、大学院栄養学研究科に保健学専攻が新設され、橋本が性教育およびジェンダーと教育の分野を担当することになった。「創刊の辞」には、教育学研究室に、博士課程4人、修士課程2人の院生集団が形成され、一般教育の社会科学系科目としての教育学研究室の様相が変わったことが記されている。すなわち、学年を越えた共通の院ゼミで、院生各人の対象とするテーマをジェンダーという問題視角からとらえ直す力量の形成と、社会科学としての社会調査論、調査方法についての認識を深め、自己のテーマに即した具体的な研究方法を考え出す力量の形成をめざすことになったのである。したがって、本紀要は院生たちに自らのテーマに即して展開した研究内容を対象化し表現する場として、執筆の機会を提供することを目的としていた。「創刊の辞」の末尾には、今後の課題として、「保健学分野に於ける社会調査のあり方や、社会科学的視座からなされる具体的な研究方法に関する検討へ進む」ことがあげられている。

1997年から加わった田代美江子助手（現埼玉大学教授）も含めて主に20代前半と30代半ばの「若手研究者」たちによって初期には調査方法についての学習会が活発に行われた（当時の院生の一人久保田美穂：旧姓渋谷が本年4月に本学に専任講師として着任している）。4号には大学院講義性教育学特論の特別講師としてお招きした伊藤陽一法政大学大学院教授の講義「社会統計としてのジェンダー統計」が再録され、5号には橋本、田代のカーティン工科大学アカデミックオフィス駐在報告や、本学に招聘した同大衛生学部講師のジェニー・コリンズによる健康教育研修ワークショップの様態などが掲載されている。

2003年以降、橋本が他大学研究者と共同で、3年プロジェクトの日本学術振興会科学研究費補助金研究に関わるようになり、2006年以降は研究代表として3年プロジェクトの研究テーマを少しずつ変えながら3度、更新してきた。入学してくる院生にも変化が現れ、現職を持ちながら研究を続けようとする人たちが多くなった。また、研究室にとっての大事件は活動の牽引車でもあった田代美江子助教授（当時）が2007年4月～埼玉大学教育学部に転出したことである。そこを埋めて科研研究を発展させたのは特別研究員の良香織（現宇都宮大学准教授）、茂木輝順、森岡真梨等の博士後期課程修了者たちであり、研究室事務と本紀要の発行を支えてくれたのは村田純子続いて、佐久間慶子の両氏である。

これまで、300名ほどの卒研生や20名を超える院生・研究生に出会い、いろいろなテーマで議論をし、文献を読み合った。多くのことを学び、考えさせてくれたこれらすべての人々、さらに研究室スタッフに深く感謝するものである。（橋本紀子）